

子どもの理解・受容・指導

秋山 和夫

新しい幼稚園教育要領や保育所保育指針では、「子どもから」の発想が大切にされている。子ども一人一人の発達特性や、それぞれの子どもの興味や

関心を理解し、把握することなしに、一方的に保育者が子どもに活動を指示したり、強制することを止めようというわけである。

幼児が自分で遊びを見つけて、主体的にその活動を開拓していくことができるような態度や能力を幼児に育てていくことが望ましいことだと考えられている。

自発性とか主体性は、現代のような変化の激しい社会、生涯学習社会においては、必要な能力である。そのために、幼稚園から高等学校に至る学校教

育においては、自ら活動する意欲や活動することの楽しさや成就感を育てることが、重要な課題として示されている。

ところで、子どもの自発的、主体的な活動を育していくためには、子ども一人一人の行動特性や心の内面を理解することが必要となる。それぞれの子どもの興味関心、長所は何か、友達と遊べない理由は何かといったことから始まって、さまざまな側面から子どもを理解していくことが必要となる。

しかし、子どもの行動は、保育者の価値観に合致しないものも多い。例えば、友達をたたく、花壇の花をやたらと摘むといった行動をする場合、それを一方的に禁止するのではなくて、その行動が起こる理

由に思いを巡らしていくことが、子ども理解でもある。

子どもと同じ立場に立つて考え、あるいは、行動してやることが受容である。相手の身になることが受容である。精神分析学の立場の人のみならず、心理学の人々も、最近では子どもを受容することの大切さを強調している。

子どもを理解し、受容することが大切である理由は、保育者や大人の、子どもに対する一方的な期待や要求に向けて子どもを引っ張っていくことを止め、子どもの内面から湧き出てくる自発的、主体的な活動を育てていこうということにある。教育という仕事は、子どもを望ましい方向に育て、高めていくことである。その具体的な活動を指導といふことばで表現している。最近では、指導というと、保育者の方的な要求やねらいが先行するというので、援助といふことばが好んで使われる。

それは、子どもの要求や活動を支援することが望ましいということからである。

たしかに、子どもを理解し、受容することは、保育に当たつて必要なことである。最近では、子どもを理解し、受容することが、そのまま、教育あるいは保育であると受け止められる主張が見受けられる。

精神分析の専門家の間にも、子どもを理解し、受容することが、そのまま治療になるという考え方と、子どもの理解、受容は、治療のための前提であるという二つの立場があるという。

幼稚園における指導を考える場合、子どもの理解、受容は、指導のための必要条件であるとするのか、それはそのまま指導のための十分条件でもあるとするのか。

このあたりの整理を十分行つていくことが保育の質を高めていくために、必要なことだと私は考えている。

(岡山大学)